わたしは「外人」ですか。
アイデンティティーの危機から危機的なアイデンティティーへ

ファビオ・ランベッリ
Fabio Rambelli

私は外人に違いありません。私の名前は書類に目立つのです。長いカタカナの行列のように。そして、カタカナに書き換えても、日本人に非常に発音しにくいのです。なぜなら、日本語の音声体系に「FA」や「LL」という音がないからです。そればかりではありません。私の名前は英語らしい名前ではないので、それを発音する人はもっと困るようです。もちろん、英語ふうに発音しようとしている人も少なくないのです。そのときに、私の耳に嫌な響きがします。イタリア語はまさにローマ字であるのに、どうしてわざわざその音をだいなしにしなければならないのでしょう。いずれにしても、私を知らなくても、私の名前を発音しなくても、書いた名前だけ見ればすぐ「外人性」という雰囲気が現れてくるのではないでしょうか。外部性のマークとしての名前。

もちろん、名前だけではありません。私の容貌ももちろん「外国人だよ」というはっきりとしたメッセージを伝えています。身体の身ぶり、言葉のなまり、考え方など全部、不可避的に日本の「そと」を指し続けて止まないのです。

そこで、アイデンティティーを考えるために、哲学や政治という抽象的な話よりも出発点として、日常生活においての、私自身の個人的な体験や考えについて具体的に話を進めた方がいいかも知れません。なぜなら、我々がふだん考えるようなアイデンティティーの観念の批判は、われわれが「外人」という特別な立場に立つときの、アイデンティティーの危機の個人的な体験から、始まらなければならないからです。「外人」という周辺的な立場に立つときに、中心や意味の秩序の限界がとてもよく見えてくるのです。「限界」の経験は表象の危機に繋がるので、その

ときに初めて意味の体系やアイデンティティーの表象を批判することが可能になるのです。

1．「外人」とはなにか。自己と他者との流動的なアイデンティティーたち

「外人」というレッテルは、本当に私のアイデンティティーを把握し得るでしょうか。自分の存在、自分の歴史、自分の記憶、自分の考え方は、いったい、「外人」という便利な枠組みのなかでとらえられるでしょうか。

「外人」という言葉は、いったい、なにを意味するでしょうか。いうまでもなく、外人というのは「外国人」という語の省略で、「日本人ではない」、「違う国の人」という中性的な意味合いを含んでいます。しかし、実際の使用では、もっと深い、もっと複雑な象徴的、政治的な含意を指す言葉として使われている場合が多いと思われます。実は、多くの場合は、「外人」という言葉は、ただの外国人ではなく、特に西洋人、または欧米人、あるいは、もっと具体的にいうと、アメリカ人という意味で使われるのです。そうすると、次のような代喩プロセスがあります。つまり、

非日本人＞外国人＞西洋人＞欧米人＞アメリカ人

アメリカ人は非日本人のメタファーになってしまうのです。言い換えれば、アメリカ人が日本人ではない人のモデルになっています。統計学的にいえば、アメリカ人はいわゆる「西洋」の1／4ぐらいしかいないので、アメリカ人であるよりも、ヨーロッパ人、あるいはラテン・アメリカ人である可能性の方がずっと高いにもかかわらず、一般の日本人は自分の周りに「アメリカ人」しか見えないようです。これは、現代日本文化の「ポリティカル・ウンコンシアス」(political unconscious)の力強い現れの一つだと思います*[1]。 つまり、アメリカに対する憧れと拒絶感、あるいはアメリカへの執念は、アメリカ人というカテゴリーを無限に拡大させて、世界中の人々はアメリカ人（外国人として）にほかならないという妄想が出てくるのです。もちろん、この執念は現代日本の国際関係の閉鎖性、そして、特に、日本政府のアメリカへの従順を同時的に隠す／

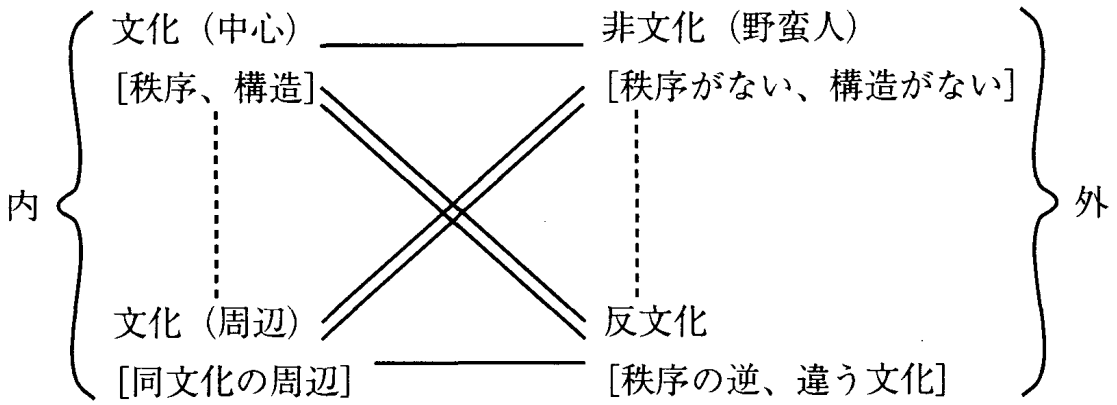
表しています。

(アメリカ人としての)外人についての偏見・ステレオタイプのフル・リストを揚げることが可能であったとしても、必要がないでしょう。日本人論の中によく出てくるのですが、「外人」は体が大きい、声がうるさい、肉をたくさん食べる、臭い、自己中心主義、エゴイスト、歴史や伝統がない、マナーがない、自然を克服しようとしている、技術や物質を第一にする、合理性にしたがう、だから美意識があまりない、というイメージがうんざりするほどくり返されています。西方にある大海に散らばっている領土(西洋の本来の意味?)に住んでいる存在は、まさに怪物のようなものです。

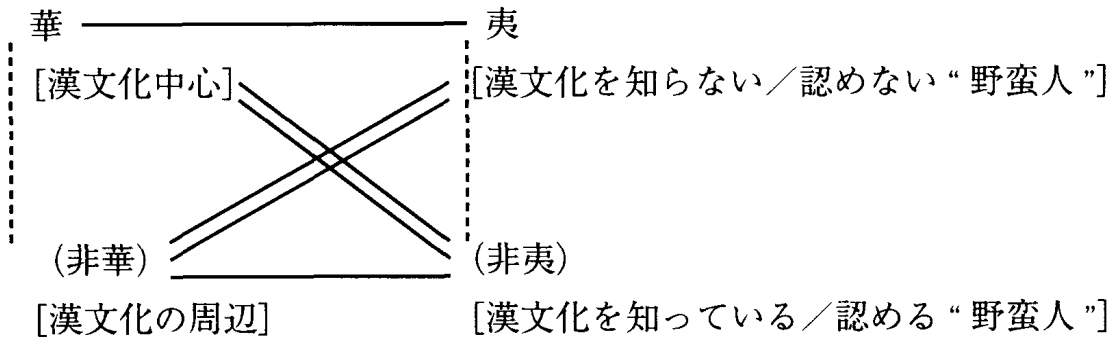
しかし、日本人と非日本人という関係を表すために、「外人」のほかに、もう一つのカテゴリーがあります。それは、「アジア人」です。つまり、日本が中心だとしたら、その周辺にまず「アジア」があって、そしてその外部に「西洋」があります。アフリカなどはほとんど無視されているのです。現代日本人のこのような世界像、あるいは日本のアイデンティティーを裏付ける「幻想の地理学」は、*2 いうまでもなく、江戸時代の世界像の延長線上にあると思います。江戸時代では、日本の文化のアイデンティティーを定義するのに、同じ円上に三重の構造が作られてきたのです。それは、日本、異国、そして外夷、という構造です。つまり、中心は日本で、周辺は「異国」という、中国文化圏の国々・地方・民族で、外部には外夷、つまり横文字で書く、箸を使わない、中国文化圏には入っていない野蛮人のことです。異国の例としては、中国人、朝鮮人、琉球人、蝦夷など、外夷の例としては、ルゾン(フィリピン)、天川(マカウ)、スペイン、そして狗国(人間の身体に犬の頭という存在の国)、烏民(鳥のように飛べる人の国)、文身(タトゥーの人の国)などが挙げられます。もちろん、外夷のなかには、幻想上、あるいは情報がほとんどなかった民族・国が多いのです。

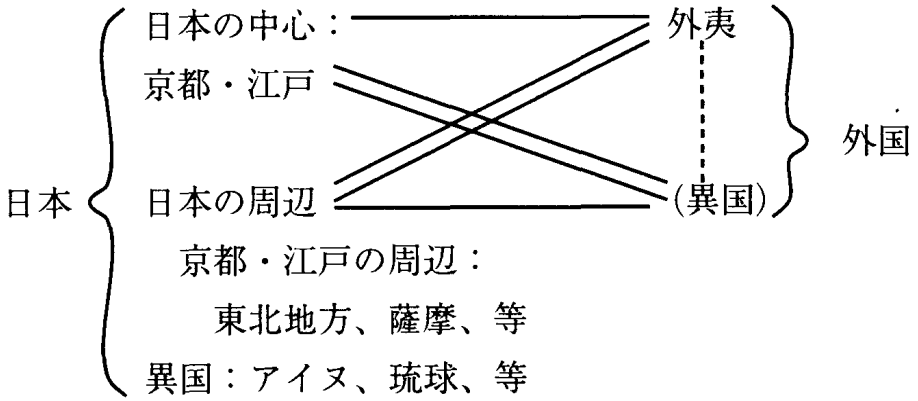
この日本・異国・外夷というモデルは、いうまでもなく、古代中国の国際関係のモデルであった「華・夷」思想の再編成にほかならなりません。*3 「華」とは「文化」、あるいは「中心」、「内」という意味で、

逆に「夷」とは「非文化」、あるいは「外部」、「外」という意味で使われていました。グレーマスの記号論的四角を借りて文化の記号論で、文化の内と外を以下のように描くことができます。*4

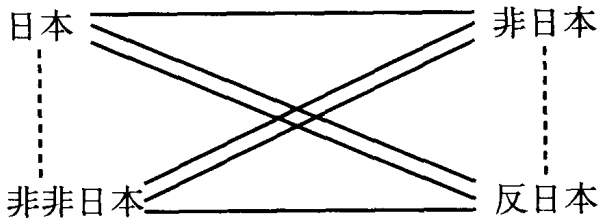


以上の二つのモデル、「華・夷」思想や日本・異国・外夷という東アジアの伝統的な文化構図を、文化の記号論的に解釈すると、次のような図式が獲得できます。

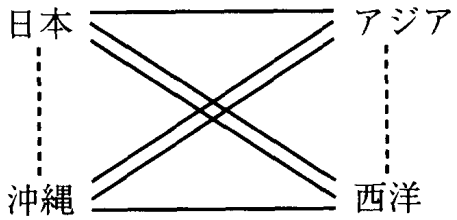




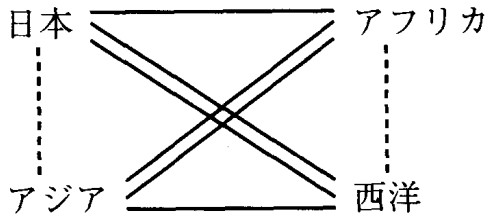
現代の状態は複雑になっています。以下の図式で表すことができると思います。



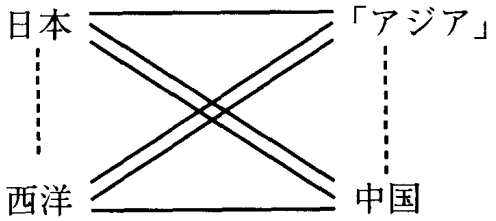
「アジア」、そして「西洋」は、日本以外の位置のどれをも占めることができると思われます。たとえば、



または、



あるいは、



といったさまざまな配合が可能です。もちろん、これらの配合は文化的な、歴史的な現実なのではなく、幻想としての文化的アイデンティティー、あるいは文化のイメージに基づく場合が多いのです。換言すれば、文化アイデンティティーは偏見やステレオタイプによって作られていることが多いのです。

このように、われわれの、ある文化のメンバーの個人的なアイデンティティーは、文化全体の自己アイデンティティーのメカニズムによって左右され、非常に単純化される場合が多いのです。こういう文化全体のモデルは、文化の中心によって決められ、文化の既存の秩序を維持するために作られています。したがって、本質的には、現実を映すモデルではなく、秩序のあるべき姿、あるいは中心的なエリートの支配の希望／夢を表しているだけです。ある意味では、文化の外部のイメージは、無知、無関心、偏見、ステレオタイプなど——言ってみれば、それらはある文化が絶えまなく作り続ける知的な「ゴミ」にほかならないですが——の生産物なのです。そして、個人的な話に戻りますが、この文化的な「ゴミ」が日本の中の私の位置付けやアイデンティティーの基になるのです。言い換えれば、日本文化の「ゴミ」が外国人の私を「理解」するインターフェースになっています。

このはなしは、あくまでも文化という制度／秩序のレベルでの話です。個人的な人間関係は大分違います。またもちろん、これは日本だけのことではありません。それぞれの文化はこのような「知的なゴミ」を使って「そと」（違う文化、外国人など）のイメージを作るのです。そこで、差異を認める文化、外へ開かれた文化もあるのですが、基本的には「そと」の世界を表象するのにある程度の偏見を動機されるのはふつうです。これからの教育の課題は、やはり差異を認める、外へ開かれた人間や文化空間をどういうふうに作り上げるかにあると私は思います。

2．ケーススタディー：イタリア人という外国人のイメージ

私のことを少しでも知っている人々は、アメリカ人ではなく、ただの

西洋人ではなく、「イタリア人」であることを知っているのです。しかし、「イタリア人」というラベルが私のアイデンティティーをうまく定義するでしょうか。イタリア人となると、文化的に作られたもう一つのステレオタイプのセットがあります。80年代の半ばまでは、イタリア人は国際コミュニティー、特に日本のマスコミによって異端視されていました。インチキ、なまけもの、いい加減、道化的——つまり、第一世界、あるいは西洋の中の「外部」です。そして、突然、80年代半ばそのイメージの価値が逆転して、同じような欠点が長所とされました。「生活の大国としてのイタリア」のイメージがここに始まりました。*5 最近、よく言われているのは、イタリアの文化生活の基に、三つの要素があります。つまり、mangiare（マンジャーレ）（食べる）、cantare（カンターレ）（歌う）、そしてamare（アマーレ）（愛する）、と。しかし、イタリア人である私から見れば、これらはイタリアの生活の基本的な要素ではないのです。むしろ、現代日本の生活、特にナイト・ライフなのではないでしょうか。東京の歌舞伎町や銀座、大阪の難波や梅田、京都の河原町、札幌のすすきのなどで行われているのは、まさに食べる、歌う、セックスする、という三つの要素ではないでしょうか。したがって、イタリアの公的なイメージは、日本の社会の「裏」の世界を描いているのです。つまり、日本の「真面目さ」と言う中心的な自己イメージ（偽善）を守るために、現実の世界を「イタリア」というレッテルで周辺化させていくのです。イタリアという遠いところ（他所）、イタリア人という他者によって象徴され、秩序にとって望ましくない部分を周辺化し、相対化し、その信憑性（オーテンティシティー）を否定しようとしているのです。もちろん、ポリティカル・アンカンシアスのメカニズムで、否定されている部分が憧れの対象にもなるのです。

この枠組みの中で、私と接触しようとしている人々が、ある程度、これらのステレオタイプを現実として信じ、それらを期待している場合も少なくないと思います。そして、私がその人の期待に答えられないのなら、「イタリア人」としての私の魅力が突然なくなるときもあるのです。

この場合も、つまり「イタリア人」に繋がっているステレオタイプも、私のアイデンティティーをうまく捉えられないのです。もちろん、イタ

リア人についてのステレオタイプは日本人によってのみ作られているわけではありません。イタリアも、ほかの文化と同じように、自己イメージを絶えまなく作り続けているからです。しかし、それらのイメージによっても、イタリア人のアイデンティティーを写せないのです。

しかし、いままで話してきたなかで、一つの大きい問題点があると思います。それは、文化・国家・国民の曖昧な区別です。つまり、今までの話は、この三要素をほとんど同義語として使ってきました。国家という領土に住んでいる人々（国民）は、同じ文化を所有している、と言う前提のもとでは、我々はふだん、ある個人の文化的なアイデンティティーを考えるときに、個人的な特徴は二次的で、偶有のものになってしまうのです。そうすると、個人的な性格も正しく理解できなくなるし、その個人が所属する文化の多様性や複雑性が見えなくなってしまうのです。もちろん、一般的、あるいは普遍的なカテゴリーがなければ、個人／個別的なものは理解できないと思いますが、しかし、普遍的で、表面的なものしか見なければ文化の生命やその豊さが消えてしまうのです。ここから脱出するためには、安全なステレオタイプによる文化間のインターフェースを避けることが必要です。文化間コミュニケーションのインターフェース／壁が、文化の外部性を隠そうとしながら、文化の限界もはっきりと示してくれるのです。そして、人の理解の障害物になるそのインターフェースを破ることによって、私たちの前に違う世界が広がっていくのです。

3．文化＝国家＝国民の限界

私はまぎれもなくイタリア人です。しかし、その証拠は何でしょうか。イタリアに生まれたからですか。しかし、イタリアに生まれてもイタリアの国籍を持っていない人もいます。私の両親がイタリア人だからですか。しかし、両親がイタリア人でその子供がイタリア人ではないケースもあります。イタリア語をしゃべっているからですか。いや、これだけでは十分ではないでしょう。それでは、私のイタリア人性はどこにあるのですか。

たしかに、私のパスポートはイタリアのパスポートです。しかし、答えはそんなに簡単ではありません。ヨーロッパ連合だから、私のパスポートは12ヵ国語で書かれています。その12ヵ国語のなかの、いくつかを知っていますが、ほかは分かりません。つまり、私の正式のアイデンティティーを定義する唯一のドキュメントには、私についての重要な情報が、私も分からない言葉で書いてあるわけです。したがって、私の正式のアイデンティティーは限りなく曖昧になっていきます。

たしかに、わたしは、イタリア人の両親の子どもとして、イタリアに生まれたというのがまぎれもない事実です。しかし、私は、最初に耳にした言葉が、おそらくイタリア語ではなく、両親がしゃべってるロマーニャ弁——特に、ラヴェンナ県の北部のヴァリアントでした。最近分かったのですが、私にとって本当にアット・ホームな気分は、周りの人がイタリア語ではなく、ロマーニャ弁でしゃべっているときです。しかし、またこんなに単純ではありません。両親は私にロマーニャ弁を教えてくれなかったのです。子供のときに、私に対してしゃべっていたときに、いつもイタリア語でしゃべっていたのです。その結果として、ロマーニャ弁は分かるけれども、ほとんどしゃべれないのです。しゃべってみても、すごい変なアクセントです。そうすると、私は、私の本来の言語・母語、私の言語システムの基になる言葉からいつも離脱の状態にいる、という気がします。

たしかに、私の教養はイタリアの国立教育制度の結果です。その長所と欠点は、私の知的な活動によく見えると思います。言うまでもないですが、イタリアの国立教育制度には「良い国民」、つまり「良いイタリア人」を生み出す目的があります。しかし、私の教育は比較的に幅広かったのです。イタリアのことだけではなく、ヨーロッパや全世界に対して感心を持たせたインスパイリングな先生方が少なくありませんでした。やはり、私の教育でも、ただの、単純なイタリア人と言う感じではないでしょう。それに、私の場合は、もっと複雑だと思います。

私は、19才のときから、大学で日本語・日本文化を勉強してきました。今まで全部で5年間ぐらい日本に住んでいて、日本の文化や社会のこと

を多くの日本人よりも知っているのではないか、と思われるのです。でも、やはりそれだけでは日本人になるのに足りないようです。その他に、アメリカに4年以上住んだ経験もあります。アメリカの社会全体をそれほど好きではないが、研究や仕事の関係で、英語で書く、あるいは英語で発表することが多いのです。アメリカに親しい友人もたくさんいます。

私が言いたいのは、つまり、私のアイデンティティーを、普通の「文化＝国家＝国民」というモデルで理解できないということです。国家よりスケールの小さい次元（地域文化）やスケールの大きい次元（グローバル、あるいはトランスナショナルの文化）も重要な役割を果たしているのです。

4．危機的なアイデンティティーのために

こういうマルチ次元のアイデンティティーを持っているのは、もちろん私だけではありません。少数の人間でもないと思います。逆に、それは大半の人の日常的な経験かも知れません。しかし、私たちはふだん、こういうコンプレックスなアイデンティティーを考える思考のツールがあまりないのです。ナショナリズムを促進する教育制度は複雑な思考法をできるだけ排除しようとしています。これは、特に日本に明白です。自由に国家から国家へ、文化から文化へ移動できるような時代になっているのにも関わらず（あるいはそういう時代になっているからこそ）、こういう閉鎖的な思考やアプローチの限界が明瞭になっているのです。マルチ次元の思考が必要になってきているのです。移動する人々（ある意味では、今の時代に、誰でもある程度移動していると思われるのですが）のアイデンティティー――つまり、私たちのアイデンティティーを理解するために、先ほど見たような文化のインターフェース――偏見、ステレオタイプ、単純なイメージ――つまり、文化が作り出す「文化的なゴミ」を、もはや捨てなければならないのではないでしょうか。文化はそれぞれの限られた範囲だけで生き残ることができないし、その限られた範囲は人・もの・アイデアの流通の妨げになるのです。ユリー・ロトマンが指摘したように、文化というのは、グローバルな次元で機能す

るものです。ロトマンはその次元を生物学の「生物圏」というコンセプトに因んで「セミオスフィア」(「記号圏」)と呼んでいました。*6 まさに、文化の記号圏に適した「複雑性の思考」を身につけなければなりません。それによって、私たちの個人的なアイデンティティーの複雑性を認め、生かすこともできるでしょう。こういう限りなく危機的なアイデンティティーは、おそらく今の時代にもっとも適した「弱い主体性」、「公開的社会」の一つの要素かも知れません。

注

＊1. Frederic Jameson, *The Political Unconscious*. Ithaca: Cornell University Press, 1972

＊2. 「幻想の地理学」という観念について、ファビオ・ランベッリ『イタリア的考え方』東京：筑摩新書、1997年、参照。

＊3. 「華・夷」思想や日本・異国・外夷という近世日本の国際関係の構図について、Tessa Morris-Suzuki, "A Descent into the Past: The Frontier in Japanese History," in *Multicultural Japan : Palaeolithic to Postmodern*. Folifed by Donald Denoon *et al*.Cambridge : Cambridge University Press, 1996 : pp.81-94. 『和漢三才図絵』巻13：220－280ページ（「異国人物」）、巻14：281－409ページ（「外夷人物」）；Fabio Rambelli, "Geopolitics of Mandala: Japan as a Divine Land" (paper presented at the 2000 annual meeting of the Association for Asian Studies, San Diego).

＊4. 記号論的四角について、Algirdas Julien Greimas, *Structural Semantics*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1983 (1966) . Umberto Eco, *A Theory of Semiotics*. Bloomington : Indiana University Press,1976. 文化の記号論について、Jurij M.Lotman and Boris A.Uspenskij, *Tipologia della cultura*. Milan : Bompiani, 1995 (173)

＊5. 日本においてのイタリアのイメージについて、ファビオ・ランベッリ『イタリア的考え方』東京：筑摩新書、1997年、参照。

＊6. Juri M. Lotman, Universe of the Mind: A Semiotic Theory of Culture. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990.